

## 釧路市立桜が丘中学校

(開校 昭和五十四年四月一日)

昭和五十年代に入り、釧路市の都市計画に基づく白樺台地区の発展と、それに伴う益浦、桜ヶ岡、春採地区の宅地化が進み、この地域の児童生徒の増加は学校のマンモス化をもたらした。

春採中学校は全道一の大規模校となり、昭和五十一年九月二十七日、地域住民、父母による新設中学校の強い要請は「仮称、白樺台中学校早期設立に関する陳情書」として提出されることになった。さらに翌年の五十二年、春採中学校PTA及び同校校下にある五小学校PTAで構成された「仮称、白樺台中学校早期設立期成会」が発足し、分離校設立実現へのスタートが切られた。

昭和五十三年 六月二一日 第一期工事着工

一月一一日 市教育委員会において、正式名称「釧路

市立桜が丘中学校」と決定

五四年 一月二二日 開校準備取扱辞令交付

作原博之湖畔小学校長、乗山和鳥取中学

校教諭

二月 九日 校章デザイン決定

三月 八日 第一回PTA設立準備委員会

初代作原校長先生の回想である。

「桜ヶ岡地区に春採中学校の分離校ということとは地区の父母の方々の積年にわたる願いであり、また現場にいたわれわれも春採中学校といえはマンモス校の代名詞であり新設校ができることは当たり前のこととおさえていた。が、自分がこの新しい中学校の創設にかかわろうとは考えてもいなかった。まったく突然に開校事務取扱の命を受け、辞令を交付されてようやく容易ならざる責任の重さを感じたことを思い出すのである。乗山先生と二人で期成会の歩みを伺ったり、母体校

の春中、校下の小学校の方々の指導を受けながらの二か月は大変であったが、PTA設立委員会をはじめたくさんの方の後押しをいただいて無事開校までこぎつけたものである」

(二〇周年記念誌「桜陵十年史」一〇ページ『あの頃』より)

四月 六日 開校式、始業式 二年七学級、三〇四名

四月 七日 入学式 一年八学級、三四九名

乗山先生は「とにかく〇(ゼロ)からの出発である。四月以降、生まれたばかりのホヤホヤの学校に数百名の生徒が入ってくる。それに向かつて、市教委の指示や作原新校長の指導を仰ぎながら限られた日取りの中で、施設設備、校訓、教育目標、教育課程、校務分掌、教職員の受け入れ、学級編成、生徒の制服、PTAづくり等に全精力を傾けて仕事に打ち込んだ。校下父母代表の方々の助力を元に」と書いている。(前掲書、一二ページ、乗山和教頭先生「私たちがつくった私たちの学校」より)

四月二二日 PTA総会、PTA発足

六月一五日 第二期工事開始

一月一七日 屋体検定

五五年 二月二二日 校歌歌詞できる。

三月一四日 開校記念日を十一月十一日に制定することを決定

四月 一日 校歌の作曲完成

六月 第三期工事開始

五六年 三月 八日 校舎落成記念式典

「出発は希望にあふれ、明るく楽しいものであった。わたしにしてみれば五年間の小学校勤務の間に中学生がこんなに変わったかと思うほどに初期の桜中生は積極的で、自主的に新しい校風づくりにはげんだ。私はくどいほど一回生の重みを口にし、一日一日の生活が伝統になつていくと言ったように思う。だから今桜が丘中学校のどこかに初期の生徒のあしあとが反映されているはずである。初年度の体育館の完成で、太平洋体育館を借りての二時間続きの授業は往復のロスがな

なくなった。第一回の桜中祭も完成と同時だったように思う。二年と一年だけでよくもこれだけ充実したものを創りあげたことは本当に嬉しかった。」  
(前掲書、同ページ 作原校長先生「あの頃」より)

### ✿ 校章とその意味

制定 昭和五十四年二月九日  
デザイン 畠山 三代喜氏

(道教育大教授)



一 円形の中に波・桜・中の字を配す  
二 波は太平洋の荒波をあらわす  
三 桜の四枚の花弁は知・情・意・体の調和の願いと外形は丘の陵線で桜が丘をあらわす

四 中の字は桜が丘に建つ校舎でもあり希望に燃え伸びゆく生徒の姿でもある。字体に鋭角を持たせ、雄々しくたくましくの感じをこめる

五 全体の円形は心あたたかく豊かに、平和を意味する

(昭和六十三年度 学校要覧)

### ✿ 校歌の制定と校歌への思い

校歌は昭和五十五年二月に作詞、同年四月に作曲とある。

狩野 敏也作詞、大橋 秀丸作曲によるものである。作詞の狩野敏也氏は北海道出身、札幌師範学校卒、北海道大学法文学部卒、道内の学校で教鞭をとる。二、三年後退職してNHKに入る。NHK放送記者として活躍。作詞時は昭和五十五年二月十二日東京在勤、とある。

作曲された大橋秀丸氏は北海道出身、旭川師範学校卒、東京藝術大学卒業、同大教授である。  
(学校保存資料による)

本校第七代校長須藤芳弘先生は、校歌について

「これは開校二十周年記念誌に依頼されて書いたことですけど、在職中を振り返ってみて、私は、あの素晴らしい校歌を『朝会のため体

育館に響かせたかった』と機会あることに思い出し、残念に思っていました。入学式、卒業式等で来校された先生方は「この学校の校歌は本当に素晴らしい曲だと思う。しかし、校歌としては難しいね」が共通した声でした。

「友よ、語ろう」と題のつく桜が丘中学校校歌、詩は狩野敏也氏が作られ、詩に添えて作原先生宛送られてきた手紙によると「フォーク調にでもしていただければユニークなものになると思いますが」とあり「使っている語とアクセントの関係や作曲上都合の良いように置き換えてもいい」と配慮されていました。作曲の大橋秀丸氏は同じように作原先生宛「一、いかになじみをもって歌えるか 二、いかにやさしくするか 三、いかに美しく流れぬ切れよくするか、の三点を作曲上の目標にした」と書かれていた、とのことでした。なるほど、そうであれば作詞者の意図、作曲者の願いにそってなじみをもって歌えるように指導したかった、が、できなかった。それで残念なんです」と述懐した後、

「二十周年式典の時、生徒の歌った校歌は在職中に聴いたことがないような大きい声で、言葉もはっきりしていて、びっくりしました。忘れることができません」と嬉しそうに話され、「練習もしたでしょうし、ピアノが生徒によく聞こえるように配置されていて、生徒席の真ん中においてありました。先生方も要所についていたようです。いつもあのように歌っていたら、やがて卒業後何年か過ぎてても覚えていていつでも歌えることができるんでしょうね。今までの校歌のイメージとは違うユニークな校歌でしょうけれど、末永く愛唱してほいですね」と感慨深げに語った。

生徒たちが、心ゆくまで校歌を歌い、友情を確かめ合ってほしいものである。

参考資料 十周年記念誌「櫻陵十年史」

(昭和六十三年十一月一日)

# 桜が丘中学校 校歌

(友よ語ろう)

桜が丘中学校 校歌

狩野 敏也 作詞  
大橋 秀丸 作曲

♩ = 108

ともよ かたろう あのうみのことを はれ  
た ひもきりのひも またゆき - のひも いつも  
かたりかけてくる おおしいなみやさしいな  
み みわたせば そらのまきば くものひつじ  
その - はてに すいへ - いせんは ひかるみ  
らいのよう にともよ かたろうあの  
うみのことを

♩ = 80

ああ ふりかえりみるうみ - あお - ぐそ  
ら - そのあわいにいき - て - かたりつぐな

み - のちか いろかいのおしえ - 2 - こ  
こ - に - つく - ろう - ふる - さ - と  
を - うみのみえるお か うみのかおるお かい  
つ - のひにも おもいおこす - さくらがおか - そ  
のおかに - さくらがおか - そのお - かに -

## 桜が丘中学校校歌

- 一 友よ語ろう あの海のことを  
暗れた日も 霧の日も また雪の日も  
いつも語りかけてくる  
雄々しい波 やさしい波  
みわたせば空の牧場 雲の羊  
そのはてに 水平線は光る  
友よ語ろう あの海のことを
- 二  
友よ語ろう あの花のことを  
晴れた日も 霧の日も また雪の日も  
いつも心にうかぶ  
雄々しい花 やさしい花  
ほほえんで冬を忍び風に耐えて  
いつの日か エゾヤマザクラは咲く  
希望のように  
友よ語ろう あの花のことを
- ああ ふりかえりみる海 仰ぐ空  
そのあわいに生きて 語りつぐ  
波の誓い 榎の教え  
ここに作ろう ふるさを  
海の見える丘  
海のかおる丘  
いつの日にも 思い起す  
桜が丘 この丘に